

# まんだら通信

第246号 (通巻280号)

平成29年01月 西暦2017年 佛曆2583年 皇紀2678年

安房国八十八ヶ所 第一番札所  
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org

## 組むなら日本と

ご存知、長尾川にかかる眼鏡橋は、今から百二十年前の明治二十一年に竣工したそうです。日清戦争の数年前ですね。今、千葉県の有形文化財でもあり、『房総の魅力500選』にも登場します。村民の寄付金で賄われた総額は、三百九十九円四十銭だったそうです。幅四メートル長さ二十メートル、洋式三重で石組みのこの橋を、大東亜戦争中に戦車が通ったりして少し痛みましたが、十年ほど前補修工事をして立派に蘇りました。明治五年、政府は公教育の制度を作りました。このときも、

入れ物である学校はみんなの寄付で作ったそうです。これらが、今の金額でどれくらいかはわかりませんが、その日暮らしの村民にすれば、相当に大きな額だったろうとは思いますが。橋や学校などは公共の施設ですから、今ならみんなが必要と思っても、お上が予算をつけなければ出来ないものと、みんなが思っています。何故、その頃は自前ですんなりと出来たのでしょうか。

それは徳川幕府のやり方を、みんなが身に付けていたからだ、私は思っています。つまり、自分たちのことは自分たちですということ、今風にいうと『地方自治』の心ですね。小説やドラマで、生かさず殺さずでちじこまっている百姓・町人と、権力を笠にきてふんぞり返っているお侍や殿様が出てきますが、これは間違いだそうですね。

もしそうだとすれば、この幕府が二百六十年余り、武力も使わずに続く筈がありません。事実この間、明治維新に至るまで内戦はありません。多分世界でもこんな国は他になかったのではないのでしょうか。端的に言えば、決まり事さえ守っていれば、身分にかかわらず、安心して暮らすことが出来る国だった、ということですね。

松尾芭蕉の『奥の細道』に、借りた馬を返すときに、馬の背中に借り賃をくくりつけて帰したという、ウソのような話があるそうですが、馬が一匹で駄賃を背負って飼主の許に帰るなど、この国の治安が如何に勝っていたかという証拠ですね。

明治の始めに、東京から北海道まで旅をしたイギリス女性、イザベラ・バードの『日本奥地紀行』にも、日本人の、約束事

を守る心、生き物を慈しむ心(四つ足を食べるのは苦手、という人多かったですね)、相手思いやることなどについて、世界でも稀な美しい心の人たちであると。繰り返し、べた褒めしています。今でもその心は伝わっているから、道ばたに自動販売機が無防備に置いてあります。番人がいないお金は盗られてしまう、というのは世界の常識で、ヨーロッパなどでは店の中にしかないのだそうです。中国人など、こそこそ盗むなどという面倒をせず、土木用の重機を盗んできて、ATM(現金の受け払い機)をもろに持って行きます。私たちが住んでいるこの世界は、娑婆世界といいますが、『シャバ』はインドの古い用語、サンスクリットの『サハ』の音訳で、漢訳では忍土といいますが、つまりお互い我が俤は引つ込めあいながら暮らす、ということでしょうか。困ったことに、戦後の教育は個性や権利というものを教えること、義務や自己規制つまり我が俤を引つ込めることを教えることが、他人様の迷惑になるとはどういうことか、分らない人が増えてしまいました。ほんの一例ですが、今話題の『後期高齢者医療制度』です。国会で決まっていたことを、「年寄りを切り捨てるのか」とか「娘捨山」とか評判が宜しくない法律です。一つの家庭で、今までは何人も稼ぎ手がいなければ、だんだん少なくなってきた。少ない出費でやりくりせず、今まで通りの暮らし方をすれば借金をしなければなりません。そのツケは子や孫の代に払うことになります。国も同じことですね。数年前、既に日本人一人当りの国債残高、つまり借金の総額は一千八十三兆円余り、つまり生まれたばかりの赤子も含めて、一人当たり何と八百五十万円です。破産した、北海道夕張市の病院に赴任したお医者さんが言っています。これは行政だけの責任ではなく、あれもこれもと我が俤を言い続けた市民に責任があると。このままわが俤を続けられれば、日本中の町が同じになりますとも。

病気になるように気をつけられれば、医療費の赤字は間違いなく減るので。聖徳太子は『十七条憲法』のトップに「和を以て貴しとなす」と仰せになりました。縄文時代は一万五千年〜二千三百年前くらいだそうですが、人骨には傷跡がないのだそうです。これは、争いがなかったことを意味しています。弥生時代はその後ですが、傷を負った沢山の人が発掘されるのだそうです。その後、朝鮮半島の動乱時代には、難民や移民が日本に入ってきました。秦さんや高麗さんの御先祖でしょうか。主に知識人だったそうで、争いごとはなかったかも知れませんが、不安定な世の中だったことは想像できます。聖徳太子はその有り様をご覧になって、『十七条の憲法』を仰せになったのだと思います。その時から既に千三百年。暫く動乱の時代はありましたが、徳川幕府になって三百年近く、平和の時代が続きました。世界史の中で一番長い平和だと思えます。相手「も」幸せになるような心遣いを忘れな、ということですね。その心を分かりやすい形にすると、畏れ多いことですが皇室になります。神話の時代から敬愛され続ける元首を戴く国民は日本しかありません。何十年も中南米やアフリカなど世界の最貧国に、医療援助のNGO活動をしてきた、作家の曾野綾子さんが、月刊ボイス二月号で「私が政治家だったらトランプ氏に、あなた、日本と組まないと損ですよ。日本くらい有能な人材のそろっている国はないのですから。働きの者で、偽物を作ったりする人も稀です。時間は正確に守り、国中清潔です。庶民の受けている教育程度は高いですから、町工場の製造業者までが、常に工夫を凝らし、発明を重んじ、効率を考え、製品の精度を競っている。あなたの国のように、恐ろしい肥満体質の人も町に殆どいませんしね。そんな国民性なんて、他に見たららないですよ。と言ってやるのだが」と書いています。ロシアのプーチンさんも、中国の習近平さんも日本と組まないと損をします。

にっぽん人情小噺 三遊亭鳳豊  
第三十七話 焼鳥屋さん

えー、相変わらず嫌な事件が続きますねえ。

落語の世界では、こんな小噺がありますので、ひとつ。

「おいおい、この間、町内で起こった事件、すごかったねえ」

「ああ、若い娘が突然刺された事件か」

「そうだよ、真昼間なのに、なんで犯人が捕まらないんだらう」

「いや、もうすぐ解決するよ、あの事件」

「どうして」

「どうもな、真犯人を角の団子屋がね……」

「団子屋が真犯人を？」

「み・た・ら・し」

今日は、私の友人でもあります焼鳥屋さんの話をいたしましょう。  
彼は元俳優です。ですから、若い時の写真を見ますと、苦み走ったとてもいい男でした。出身は北海道の釧路。大変に貧しい家に育ったので、定時制の高校を出ますと、母に作ってもらったおにぎりを三つ持って、上京します。  
ひとつは、青函連絡船の中で、もうひとつは上野に  
もうすぐ着くという列車のなかで、そして最後は旅館のふとんのなかで涙を流しながら食べたそうです。

翌朝、旅館代を払ったら、もうおカネがなかったそうですが、あの柔らかなふとんにくるまったときの温かさは一生、忘れないと言います。冬の北海道。一枚のせんべいぶとんに弟と妹の三人で寝ていた毎日でしたから、ふわふわしたふとんで寝るのは、まさに夢心地だったにちがいないありません。翌日から職探しです。でも、幸い、繁華街のキャバレーのボーイの仕事が見つかりました。彼は、深夜まで働き、店のボックス席を借りてそこに寝泊まりしていました。しかし、無理がたたったのでしょ。体をこわし、店の倉庫に運ばれ、医者に診せるカネもないまま、倉庫のビールの空きビンのなかでただ横たわっているだけでした。話し相手は時々やってくるネズミだけ。そのネズミが北海道の母に見えたそうです。

「かあちゃん……」

思わず、そう叫ぶと、こらえていた涙が一気に頬をつたいます。その深夜、心配してくれたひとりのホステスがやってきます。そして、気がついたとき、彼は病院のベッドにいたのです。そのホステスさんも苦労人でした。恋人を事故で亡くし、好きでもない客の愛人となって夢のない毎日を送っていたそうです。もちろん、彼より年もずっと上ですから、きつと弟のように思っていたのでしょうか。

彼女の猥褻的な介護があり、さらには愛情に支えられて、昼は演劇スクール、夜はボーイという生活が始まりました。やがて、自立した彼を見届けると、彼女は別のサラリーマンと結婚します。  
それから十数年、彼はテレビの『大都会』や『西部警察』などのドラマにレギュラーとして出演する俳優になります。ところが、好事魔多しですね。ファンと自称する女に馴され、強姦致傷容疑で逮捕されてしまいます。和姦を主張しますが、裁判所からは懲役四年を言い渡され、彼は津刑務所に入ります。  
前置きが長くなりましたが、話は出所後、彼が俳優をあきらめ、見知らぬ土地で焼鳥屋を始めたある日に飛びます。

屋台で焼鳥を売っていると、ひとりの少女が泣きながら歩いている姿を目にしました。訳を聞いて驚きました。妊娠しているというのです。聞けば、高校二年生。親に相談したのかと言えぬ、相談できない。このまま川に飛び込んで死ぬという。あとは、ただただ泣くばかり。「それじゃあ、おじさんがなんとかしてあげるから、とにかく死ぬのだけはやめよう」  
彼はさっそく地元から十数キロ離れた産婦人科に彼女を連れていきます。そして、あろうことか、医者にこう言ったのです。

先生、俺、馬鹿なことをしちゃった。娘みたいな年の子としちゃってよ、この子を妊娠させた。  
「俺は逮捕されてもいいから、この子の将来のためによ、子どもを堕してやって下さい」  
医者とその奥さんは、彼を罵倒し続けたあげ

く、ようやく見せしめのためか、彼女に宿った命が墮ろされる現場を見ることを条件に、手術を了承してくれました。彼女が目覚ますと、隣りに彼がいました。

「焼鳥屋さん……」

「何も言うな。二度と馬鹿なことをしてはいけないよ、いいね」

そう言うと、彼はアイスクリームをひと口、スプーンですくって、彼女の口の中に入れてあげました。

それから、十年後、焼鳥屋さんはその子の噂話を耳にしました。彼女は、幸せな結婚をし、子供がふたり、六歳と三歳になるそうです。でも、子供がアイスクリームを食べるたびに、大粒の涙がこぼれて止まらないのだそうです。  
「ママ、なんでいつもアイスクリームを食べると、泣くの？」  
「あなたがね、大きくなったら話してあげる」  
その話を聞いた彼の目にもうつつすら涙が浮かびました。

「よかったなあ……よかった、よかった」  
「おい、親父、レバとハツ、タレで」  
「へい」

大辻慎吾。本名、堀部一雄。茨城県竜ヶ崎という小さな町で、今夜も酔客を相手に、焼鳥を一生懸命焼いています

「人情小噺」が楽しみです。というお声を聞きます。先月号でも書きましたが、MOKU出版が営業をおやめになりました。暫くの間は、以前掲載したの中から選りすぐって再掲載します。ご期待下さい。



2017.01.09 龍渉

▼今月の野草。皇帝ダリア【キク科テンジクボタン属】です。原産地はメキシコから中米。自由に伸ばすと4メートルほどにもなり、茎も太くて、ノコギリでないと切れません。日が短くなるのを待って花がつく性質だそうで、11月ごろ一斉に咲き始めます。背が高いため、台風でなぎ倒されやすく、真っすぐ育つことは寧ろ稀です。けれども、コスモスと同じように、起き上がって咲き続ける姿が愛おしくて好きです。晴れ渡った青空のもと、乱れ咲く明るいピンクが可憐です。

▼新しい年が始まりました。相変わらずの内容で、いささか気が引けますが、今年も宜しく願い申し上げます。  
気候の変動が大きい冬です。暫くの間は肺炎とインフルエンザに嚴重注意をと、主治医に言われています。  
▼近ごろ「日本を見直そう」という雰囲気、漂い始めています。NHK BS1で『クールジャパン』、民放にも似たような番組が幾つか。私が読んでいた雑誌では、保守系の『ウィル』『正論』。新しいところで『Hanada』『ボイス』。他には月刊『明日への選択』が、ページ数は少ないながら、内容の濃い論説が説得力があると思います。最近買った単行本は決定版日本人論(渡辺昇一)財務省と大新聞が隠す本当は世界一の日本経済(上念司)さらば資本主義(佐伯啓思)生かされる命をみつめて(五木寛之)日本人の甘え(曾野綾子)人は皆土に帰る(曾野綾子)縄文人の世界観(大島直行)総理の誕生(阿比留瑠比)トランプ大統領から始まる中国大乱(黄文雄・石平)新しい日本人が日本と世界を変える(日下公人)など。極め付きの月刊左翼誌『デイズ・ジャパン』なども。  
▼生け垣の中から、ウグイスの鳴き声が聞こえてきます。『地鳴き』というそうですが、別の言い方『笹鳴き』の方が優雅に聞こえて私は好きです。寒さに震える寒中の今ですが、春が近づいています。

余滴